

書評

Н. В. Шелгунов, Л. П. Шелгунова,  
М. Л. Михайлов. Воспоминания в двух  
томах. Том первый. Воспоминания Н.  
В. Шелгунова. Том второй. Воспоми-  
нания Л. П. Шелгуновой и М. Л. Ми-  
хайлова. Издательство «Художестве-  
нная литература». 1967

直野 敦

評書 (91)

本書は、十九世紀の六十年代から八十年代にかけて活躍したロシア急進派の思想家、文学者、いわゆる革命的民主主義派に属する三人の著者の回想記、手記をまとめたもので、『文学的回想録叢書』のひとつとして一九六七年に発行された。これらの回想記、手記がひとつにまとめられているのは偶然ではない。H・B・シェルグノーフ(一八二四—一九一)、シェルグノーフの妻であるЛ・П・シェルグノヴァ(一八三二—一九〇二)、詩人М・Л・ミハイロフ(一八二九—一八六五)の三人は、いづれも六十年代の革命運動に参加した思想上の同志であっただけでなく、私生活においても深い絆によって結ばれていた。ミハイロフはシェルグノーフ夫妻の友人であったが、六十年代にシェルグノーフ夫人と恋愛関係にあり、二人の間に子供さえ生ま

れていた。しかも、シェルグノーフは——チエルヌイシェフスキーが小説『何をなすべきか』の中で描いたような『新しい人々』のモラルに従って——二人の関係を承認し、その子供を自分の長子として入籍させていた。後に、B・Д・コストマーロフ(一八三七—一八六五)の裏切によって一八六一年秋ミハイロフが逮捕され、シベリアへ流刑になったあとを追って、シェルグノーフ夫妻は、恐らく当時の急進派に共通のものであった、革命情勢に対する過大評価にもとづいて、シベリアにおける民衆蜂起を組織し、同時にその過程でミハイロフの解放を実現する目的で一八六二年春、流刑地のカザコフ金鉱を訪れる。しかし、その間に首都では革命派の指導者への弾圧が激化し、チエルヌイシェフスキー、H・H・セルノソロヴィエヴィチ等は逮捕され、シェルグノーフ夫妻もシベリアで逮捕されて、シェルグノーフは首都へ護送される。流刑地におけるミハイロフの死はその三年後であった。家宅搜索、逮捕、ペトロバヴロフスク監獄での生活、それからシベリア流刑地への旅を克明に記したミハイロフの手記が、シェルグノーフ夫人あての手紙として書かれている背後には、以上のような事情があった。

\* \* \*

本書の構成は次の通りである。

第一巻には、H・B・シェルグノーフの回想記四編、『過去と現在から』(初稿)<sup>1)</sup>、『過渡期の人間像』(一八八四年の逮捕と追放)<sup>1)</sup>が収められている。

『過去と現在から』は、一八八五年から八六年にかけて『ロシヤ思想』誌に掲載され、一八九一年のH・B・シエルグノーフ著作集の第二巻に収録された。後に一九〇九年の『文学基金記念論集』に収められた際に、九一年版で検閲により削除された箇所も加えられた。ソヴェト時代に入ってから、一九二三年にA・A・シエロフ編集による版が出ている。

第二の(初稿)は未完の断片で、シエルグノーフの生前には発表されなかった。本来『過去と現在から』の下書きとして書かれたものであり、三つの断片から成っている。その一部は『過去と現在から』と重複するが、主要な部分は——恐らく検閲を考慮してと思われる——ふくまれていない。これらの断片は一九一八年『過去の声』誌にB・ミヤコフスキーによって発表され、前述の一九二三年版にも加えられている。

『過渡期の人間像』は一八八八年『ロシヤ思想』誌上に『(過去と現在から)』の副題をつけて発表され、後に九一年版著作集の第二巻に収められた。

(一八八四年の逮捕と追放)は、本書によってはじめて発表されるもので、ソヴェト科学アカデミア・ロシヤ文学研究所に保存されている著者の原稿をもとにしている。

第一巻には付録の(一)として、H・B・シエルグノーフの起草した激文『ロシヤの兵士へ彼等の同情者より挨拶を送る』、『若い世代へ告ぐ』、『兵士へ告ぐ』、付録の(二)としてシエルグノーフについて書かれた様々の人々(ミハイロフスキー、ラヴロフ等)の回想がのせられている。

第二巻には、シエルグノーフの妻Л・П・シエルグノーフの回想記(しかし主要な部分は彼女宛のシエルグノーフの手紙から成っている)『遙かな過去より』と、M・Л・ミハイロフの(手記)が収められている。

シエルグノーフの回想記は一八九九年から一九〇〇年にかけて『婦人問題』誌に発表され、翌一九〇一年に単行本として出版された。

ミハイロフの『手記』は、本来、自分の愛人であるシエルグノーフ夫人宛の手紙として書かれたものであり、発表することを目的として書かれたものではない。そのため、この(手記)は、それが書かれて約四十年後の一九〇二年に、H・ペロゼールスキーの手でかなり自由な改変を加えられた形で『ロシヤ思想』誌上にはじめて発表された。この時の表題は『ペテルブルクからネルチンスクまで』となっていた。この手記の一部は、『M・Л・ミハイロフの手記の断片』として、一九〇五年にパリで出版された『六十年代ロシヤにおける革命運動史資料集』中に収められた。つづいて、一九〇五年の革命後、一時的に検閲が緩和された時期に(一九〇六年)、ミハイロフの手記は同時に二つの雑誌『ロシヤの富』および『ロシヤの故事』誌上に発表された。両テキスト間の異同、それぞれの欠陥等については本書第二巻の巻末に詳細な注釈があるが、それについては省略する。

第二巻の巻末には、獄中からシエルグノーフ夫妻に宛てたミハイロフの手紙、ミハイロフの弟、П・Л・ミハイロフが兄の

死についてシエルグノーヴァ夫人に書き送った手紙、シエルグノーヴァ夫人についての他の人々（ナロードキ作家H・B・ゾディムスキー等）の回想が付録としてのせられている。

以上のように、本書を構成する回想記のうち、はじめて発表されるのはH・B・シエルグノーフの（一八八四年の逮捕と追放）一編だけであるが、その他の作品もすべて四十年乃至六十年間にわたって刊行されなかったものだけに、十九世紀六十年代のロシア文学、社会思想、あるいは社会運動史の研究者にとっては、これらの貴重な資料の出版は大きな意味を持っていると言えるであろう。

以下、この三人の回想記が六十年代の社会や、著者達の思想の様々の側面を解明する上で持ついくつかの問題点について考えてみたいと思う。

\* \* \*

六十年代は、クリミア戦争におけるロシアの敗北、農奴解放、革命運動の発展、ポーランド人民の叛乱、学生運動の激化、後期には多くの革命家の逮捕、流刑、亡命等に見られるように、波瀾にみちた社会的激動の時代であった。この時代に生きた作家や社会活動家の幾人かは、六十年代についての回想記を残しているが、その中では、シエルグノーフ、ミハイロフ、およびJ・Φ・パンテレエフの手記が当時の革命運動のいわば中心部にあった人々の手になるものだけに六十年代の思想と現実を知る上でもっとも興味深い。例えば、作家ポボレイキンの回想

記で六十年代に関する部分は、当時の急進派の思想や運動に対する内面的理解を欠いた皮相な観察にとどまり、一種の風俗描写に終っている。パンテレエフの回想記は当時の非合法の革命的組織『土地と自由』の活動について多くの貴重な情報を与えるが、しかし、著者は当時まだ学生として革命運動に参加した青年であつてみれば、チエルヌイシエフスキー等を中心とする革命運動のもっとも深い部分には関与していない。シエルグノーフの場合には、チエルヌイシエフスキー、セルノソロヴイエヴィチ兄弟等と最も密接な関係にあったこと、六十年代後期における革命運動の退潮期にも、革命的实践活動にたずさわることはずでに不可能であつたにせよ、六十年代の革命思想を擁護する立場を変えず、七十年代から八十年代において文筆家、ジャーナリストとして常に一貫して革命思想の普及と啓蒙に尽したことが、彼の回想記に他の著者達の回想記に比べてはるかに深い思想性を与えている。

シエルグノーフは、六十年代に逮捕され、追放の刑をうけて後、約十五年間地方都市を転々とし、一八七七年にやっとペテルブルクへ帰ることを許されたが、再び八十年代に二度にわたつて逮捕、追放の憂目をみている。首都へ帰ることを許されたのは死の直前である。急進派の思想家として節を屈することなく、生涯、自己に与えられた分野で活動しつづけた人間の強靱な精神がシエルグノーフの回想記には読みとられるが、同時に、その蔭でどのような苦しみ（家族との別離、経済的困窮、病苦）に耐えることを強いられていたか、また時として失意のど

ん底に陥った彼がシエルグノーヴァ夫人の献身的な援助によってどのように支えられていたかということは、シエルグノーヴァ夫人の回想記に引用されたシエルグノーフ自身の手紙に語られている。

シエルグノーフの回想記の中で、六十年代のロシア社会を描いた部分は彼の思想を知る上で重要な意味を持つ。

シエルグノーフは、六十年代社会の中心的課題を「農民解放」の問題としてとらえ、この改革をどのような方法で実現するかはロシアの未来がかかっていることを洞察していた。しかも、シエルグノーフの視野には、ロシアだけでなく全ヨーロッパ的な規模での解放運動の進展が入っており、ロシアの革命運動をその中で位置づけようとする志向が存在している。他方、そのような国際的な展望と交錯しながら、ロシアの社会的発展の特殊性を強調しようとする考えも見られる。それは、ロシア十九世紀の前マルクス主義革命家に共通の思想、すなわち、「農村共同体を基礎とする社会主義の実現」が可能であり、「ヨーロッパのたどって来た個人主義的経済主義と資本主義の苦しい道」を避けることが可能であるとする思想である。しかも、このようなロシアの発展が、西ヨーロッパの解放運動に新しい血を注ぎこむことが出来ると考えている点でも、シエルグノーフは六十年代から八十年代にいたるロシアのニュートピア社会主義思想の本流につながる思想家であると言える。彼は又、このようなロシアと西ヨーロッパの経済的、社会的発展の差異から、ロシアの革命運動がより急進的な道をとるであろうとい

う鋭い考察を述べている。

六十年代の農奴解放において「上からの」、すなわち政府の手による改革をどのように評価するかという問題は革命派の思想家達の間で大きな論争を呼び起したが、シエルグノーフが少なくとも六十年代の初期において「上からの」改革に大きな期待を寄せ、これを高く評価していたことが回想記からうかがわれる。彼は「当時においては社会の任務と政府の任務との間には極端なちがいがなかったばかりでなく、むしろ、社会も政府も等しく同一の改革を目指して努力していたのである」と述べている。このような「上からの」改革に対する幻想からシエルグノーフがどのように脱却して、「下からの」革命を目指すチエルヌイシエフスキー等の立場に移行したのか、回想記の中では十分に明らかにされていない。それは恐らく、この場合も合法的出版物に発表するために検閲を考慮せざるを得なかったからであろうが、彼が「あらゆる権力の革命的否定」を主張するチエルヌイシエフスキーの思想を全面的に支持する立場に到達したことは六十年代後期における彼の活動が十分に証明している。六十年代の社会的理想とその代表者達、とくにチエルヌイシエフスキー、ドブロリヌーボフ、ピーサレフの三人に対するシエルグノーフの評価は回想記の中でも最大級の賛辞によって表現されていることからそれは理解される。また六十年代の革命運動を全体として積極的に評価しようとするシエルグノーフの意図は、六十年代後期における革命派の分裂、「同時代人」誌と『ロシアの言葉』誌の対立と論争を過少評価しようとする

態度<sup>(10)</sup>となつてあらわれている。

このように、シエルグノーフにとっては、六十年代はロシアの革命運動史上における消えることのない栄光の時代であり、殉教の時代であった。そして、彼の活動の意義は、いわばこの六十年代の遺産を守りながら後半生を革命的啓蒙家、ジャーナリストとして生きつづけ、七十、八十年代の革命運動に側面から協力しながら九十年代にはじまるマルクス主義革命運動へと六十年代の伝統を継承して行ったことにあると思われる。彼の死の直前にペテルブルクの労働者代表がその病床を訪れて激励の手紙を渡した事、一八九一年四月十五日の彼の葬儀に同じくペテルブルクの労働者代表が花環を送り、そして彼の葬儀そのものが自然発生的に反政府のデモ行進に転化し、八十年代の暗黒の時代の終りをつける警鐘となつたこと、これらすべての事実は「自分に課せられた二流の役割<sup>(11)</sup>」を黙々と誠実に果しつづけた一人の人間の生涯を象徴するものと言えるであろう。

\* \* \*

ミハイロフの(手記)のはじめの部分は、ペトロバヴロフスク監獄における生活、訊問や裁判におけるツァーリズム官憲の姿を描いているが、その主要な部分は、憲兵の護送の下でのペテルブルクから流刑地カザコフ金鉱までの旅の記録、トボリスクおよびイルクーツクの監獄内の生活の描写にあてられておりツァーリズムの下での民衆の悲惨な無権利状態、ポーランド人政治犯に対する非人間的な扱い、絶対君主的な権利を持ち、

「民衆を好き勝手なものをそれから捏ねあげることの出来る粘土のようなものと見なしている」<sup>(12)</sup>地方官憲の姿を描いて、ツァーリズムの全体制に対する痛烈な批判となつている。また、政治犯に対する異様なほどの尊敬と崇拜の念が地方の知識人や庶民の間に根強く存在する事実も描かれている。ドストエーフスキの『死の家の記録』が五十年代のシベリア流刑地と監獄における人間を描いていたとすれば、ミハイロフの(手記)は、六十年代の流刑地およびシベリアの監獄のリアルな描写としてロシア文学史上に重要な地位を占める作品と言えよう。

ミハイロフの『手記』には、二十年代の革命家、デカブリストのザヴァリーシンや、四十年代の革命家ペトラシエーフスキ、リヴォフとの会見の場面がある<sup>(13)</sup>。そして、ミハイロフは、六十年代の革命家の立場から、過去の革命家達の流刑地での活動やものの考え方に批判の目を注いでいるが、これは十九世紀ロシアの革命思想の継承という面から興味深い点である。同じ問題は、再びシエルグノーフについてみるならば、ゲルツェンに対する態度にあらわれていると言えよう。もちろん、この場合はより複雑である。ゲルツェンはシエルグノーフにとって先行の世代でもあったが、同時に六十年代の革命運動に——国内と国外のちがいはあっても——共に参加した同世代でもあったからである。

シエルグノーフは、ゲルツェンが「革命を信じていなかった」<sup>(14)</sup>と主張する。ゲルツェンは「革命が不可能であり、その結果において有害であると考えていた。……破壊の論理と暴力を否定

し、自分の味方にもそうでないものにも教えを説く、伝道者、使徒こそ必要であると考えていた<sup>(19)</sup>。

シュエルグノーフがこのような評価を与えているのはゲルツェンの死後すでに十数年を経た八十年代の半ばである。だとすれば、シュエルグノーフはゲルツェンの全生涯と全活動についてこのように考えていたのであるか。ゲルツェンに対するこのような評価は様々に理解され得る。これは六十年代におけるロシア国内の革命派とロンドンの亡命革命家達との間の思想的対立が、二十年後における評価にも影響しているからであろうか。それとも、七十年代、八十年代の革命運動に共感は寄せながらも、そして自分の編集する雑誌を多くのナロードニキ革命家のために開放し、そのために権力の弾圧を身に受けながらも、ナロードニキの革命運動との間に一定の距離を感じていたシュエルグノーフ自身の立場を、ゲルツェンの思想的立場に投影しているからであろうか。いずれにしても、ゲルツェンに対して、シュエルグノーフはチエルヌイシエフスキー等に対するような全面的な共感は寄せていないが、しかしまた、ペトラシエーフスキー<sup>(20)</sup>に対するミハイロフの批判のような一義的な否定的批判を加えているわけでもない。そこにゲルツェンに対するシュエルグノーフの微妙な関係が見られるようである。

六十年代の革命的啓蒙主義の立場を堅持し、そこを動かかなかつたことよって、シュエルグノーフは、六十年代の革命家や思

\* \* \*

想家の一部が後に転向して行く心理的過程を冷静に客観的に観察し得た。六十年代の革命運動で一時期華やかな活動をした

B・И・ケリシエフについてシュエルグノーフは回想記の十六章で論じている。ケリシエフが公式の転向書とも言うべき小冊子を発表したのは一八六八年であるが、ケリシエフに限らず、これらの転向者達の人間タイプをシュエルグノーフは六十年代のように古いものと新しいものとが激しくせめぎあう転換期に必然的に生じる一つの社会的典型、『二重性格の人間像』としてとらえている。ミハイロフ、シュエルグノーフ、チエルヌイシエフスキー等を官憲の手に売り渡したB・Д・コストマロフについても、シュエルグノーフは意外なほどに寛大であり、「病気で不幸な人間であった<sup>(21)</sup>」と書いているが、これは一つにはコストマロフのスパイ、挑発者としての役割を彼がこの当時知り得なかつたことも原因であつたと思われる。

彼は転向者だけでなく、終生、進歩派のジャーナリストとして活躍した友人のΓ・E・ブラゴスヴェートロフ(一八二四—一八〇〇)にさえもこのような「過渡期の人間」としての二重性をみとめており、その鋭い人間観察の眼をのぞかせている。

三人の回想記は以上のような問題以外にも、例えば権力機構の内部における革命運動への同情者の存在、三人の家系と革命的伝統との結びつき、その他多くの興味ある問題について考えさせるものを持っているが、これらの問題についての検討はまた別の機会に譲りたいと思う。

(1) (初稿)、(一八八四年の逮捕と追放)はそれぞれ未完

- で、未発表の断片であり、本来、表題がついていなかった。本書における表題は編集者のつけたものであり、著者によって発表された他の作品の表題と区別するために括弧に入れて示すことにした。シハイロフの(手記)も同様である。尚、以下の注では本書を *Воспоминания* として指示する。の著者シハイロフの弟であって、相田重夫氏の『シムリマ流刑史』(中公新書97)一三二ページの記述で兄となっているのは間違いないである。
- (3) *Воспоминания*, т. I, стр. 95
  - (4) Там же, стр. 94
  - (5) Там же, стр. 95—98
  - (6) Там же, стр. 96
  - (7) Там же, стр. 97
  - (8) Там же, стр. 183
  - (9) Там же, стр. 200, 237

- (10) Там же, стр. 215
- (11) Там же, стр. 388. Н. К. Михайловский. Памяти Николая Васильевича Щеглова
- (12) Там же, т. II, стр. 421
- (13) Там же, стр. 402—405, 420—422
- (14) Там же, стр. 402
- (15) Там же, т. I, стр. 126
- (16) Там же.
- (17) 一八八四年のシエルグノーフの逮捕と追放は、彼が自分の編集する『シエーロ』誌に、С・М・ステブニャク・クラフチンスキー、В・А・ザイツェフ、Л・А・チホミロフ等、ナロードニキ革命家の原稿を掲載したことが主要な原因となっている。
- (18) *Воспоминания*, т. I, стр. 167

(一橋大学講師)